

びょういん発

<主な記事>

- ・院内コンサート開催
- ・売店・光庭のリニューアル
- ・タンパク尿と言われたら
- ・タンパク尿とくすり
- ・新任医師紹介
- ・新人紹介

2015

7月 No49



院内コンサートを開催しました！

入院患者さんに「癒しの場」を提供し、心のケアにつなげることを目的に、6月18日に院内コンサートを開催しました。演奏者のLickLuck（リックラック）の皆さんは、エレクトーンやピアノカ、ジャンベを使い、「島唄」「さとうきび畑」など沖縄の歌を中心に全10曲を演奏しました。参加された皆さんには、美しい音楽を聴きながら、リラックスしたひと時を過ごしていただきました。



●売店・光庭のリニューアルを行いました！

これまで売店を利用される方の飲食等のスペースが狭く、またその対策について、多くのご要望をいただいております。

このたび、売店付近で飲食できる空間として光庭を整備・開放し、テーブルや椅子を設置しましたので、休憩スペースとしてご利用ください。また、売店では焼きたてパンや淹れたてコーヒーをご提供していますので、ぜひお立ち寄りください。

(淹れたてコーヒー)



大和市立病院で働きませんか！？
職員募集中！

気軽にご相談
下さい！

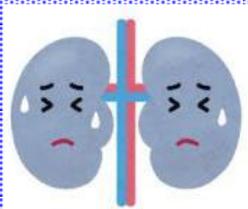
<お問い合わせ先>

病院総務課 総務調整担当

TEL:046-260-0111 内線 2347



タンパク尿と言われたら



腎臓内科 竹下 康代



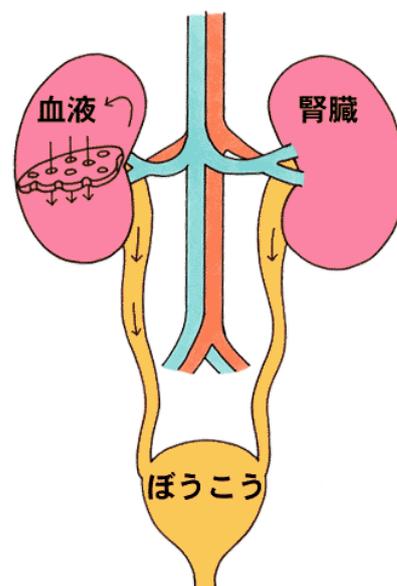
タンパク尿とは

尿の濃さにもよりますが、尿タンパクが1+と判定された場合には、1日に正常以上のタンパクが尿に下りていると考えられます。それでは、タンパク尿が指摘された場合にはどうすればいいのでしょうか。

タンパク尿はなぜ出るのか

腎臓に流れ込む血液は、まず糸球体というところでろ過されます。この際、タンパク質などの大きい物質はほとんどろ過されません。わずかにろ過されたタンパク質も、尿細管という細い管を通過している間に処理されるため、正常では尿に出る量はきわめてわずかです。

しかし、糸球体が病気になると、多量のタンパク質がこしだされることがあります。このような場合には、尿細管での処理が間に合わず、尿にタンパクが下りる結果となります。したがって尿にタンパクが下りるという場合にはまず糸球体の病気、すなわち慢性腎炎などの可能性があります。



タンパク尿の程度とは

1日にどれだけ尿の中にタンパクが出ているかが重要です。しかし試験紙で1+、2+などと言われても、これはあくまでもその尿のタンパクの濃度を示しているだけで、1日にどれほどのタンパクが出ているのかわかりません。これはタンパク尿の原因を知る上でも重要です。1日の尿タンパク量を正確に測るために24時間蓄尿して、その一部を検査に出して1日の尿タンパクを測定します。

タンパク尿と言われたら

タンパク尿を指摘されたら、腎炎の可能性があるのか、問題のない一過性のものか、あるいはその他の病気であるのか見定める必要があります。これには尿沈渣などの他の検尿所見が役立つことが多いのですが、早朝尿による再検査でも同じようにタンパク尿を指摘されたり、1日の尿タンパクが0.5g以上であるような場合には、専門医を受診することを勧めます。

糸球体腎炎（腎炎）とは

糸球体の炎症によってタンパク尿や血尿が出るような病気は総称して糸球体腎炎と呼ばれ、様々な種類があります。

① 慢性糸球体腎炎（慢性腎炎） ② 急性糸球体腎炎（急性腎炎）

① 慢性腎炎

非常に複雑な病気です。慢性腎炎は1つの病気ではなく様々な病気の総称なのです。したがって、症状や予後（腎不全に進行するかどうか）も様々です。原因もほとんどわ



かっていないために、専門医の間でも治療法に多少の差があるのが現実です。

しかし、腎生検などにより正確な診断が行われた場合、専門医の間ではそれほど違った説明は受けないと思います。とにかく正しい診断が先決です。

腎生検による正確な診断を受けるには入院も必要ですし、多少の危険を伴うこともまれにあります。まず腎生検が必要か否かを判断する必要があります。このためには、まず症状から分類する方法があります。検診で血尿だけがみられる場合、タンパク尿を伴う場合、ネフローゼ症候群を呈し、むくみで発見される場合、急速に腎不全となる場合など、様々です。



② 急性腎炎

扁桃やのどの炎症が治ってから1～2週間後に血尿やタンパク尿、むくみ、高血圧が現れるのが特徴です。急性腎炎の原因は、溶血性連鎖球菌などの細菌による扁桃やのどの炎症がきっかけです。これらの細菌が抗原となって、これに対する抗体が作られます。この抗原と抗体の結合した免疫複合体と呼ばれる物質が腎臓の糸球体にくっつくことによって糸球体の中に炎症が起こります。糸球体の中に白血球などが集まり、糸球体の細胞も増殖して毛細血管が詰まってしまい、血液の流れが悪くなるため腎臓の働きが低下します。一般に急性期を過ぎると浮腫が軽快するとともに血圧が正常に回復し、通常1～3か月後には血尿やタンパク尿は消えてしまいます。



まとめ

タンパク尿は、腎臓に炎症がおきていることのサインであり、放置すると腎不全の進行を引き起こすことがあります。末期腎不全になるまで自覚症状が乏しいことが腎臓病の特徴であり、早めに医療機関を受診して、定期的な血液検査、尿検査を受けるとともに、慢性腎炎と診断された場合には、食事療法、降圧剤などの薬物治療を受けて、腎不全に移行しないように注意しましょう。



タンパク尿とくすり

薬剤科 塚田泰隆



「血圧の薬を飲んでいただけ、血圧はもう高くないから止めました。」
 「血圧は高くないのに、血圧の薬を出された。薬は飲まないといけないの？」
 病棟でこんな話を聞くことがあります。みなさんには心当たりがありませんか？
 もしかしてそんなあなたは、医師から「タンパク尿が出ている。」と言われませんでしたか？

血圧の薬は血圧を下げる効果がありますが、それだけではなく、タンパク尿を減らす、もしくは今以上増やさないといった効果もあります。タンパク尿を減らすことで腎機能の悪化を遅らせ、腎臓を保護する作用が認められていますので、血圧が高くないからといって自己判断で服薬を中止してはいけません。もちろん、めまいやふらつきなど血圧が過度に下がった状況では中止しますので、そのような時には主治医や薬剤師に相談して下さい。

血圧の薬だけではなく、一部の血糖やコレステロールを下げる薬でも同様にタンパク尿を減らす効果があることが知られています。

薬が処方される目的は様々です。何を目的として処方されている薬なのか、良く知った上で服用して下さい。



新任医師紹介

今年4月・6月・7月着任しました。よろしくお願ひします。

小児科
粟生 耕太
福富 崇浩
伊奈 真一郎

外科
根本 昌之
西宮 洋史
鷲 裕亮

産婦人科
堀田 裕一朗
橋本 彩紗

循環器内科
北里 梨紗

麻酔科
境 倫宏

整形外科
古谷 一水
広田 哲史

心臓血管外科
田村 幸穂

泌尿器科
房安 秀生
川上 捻史

初期臨床研修医
國方 美穂
大山 浩司
神巻 千聡
野地 貴

形成外科
笠井 昭吾

脳神経外科
黒田 博紀

呼吸器内科
森山 雄介

耳鼻いんこう科
古木 省吾

血液・腫瘍内科
川崎 理加

腎臓内科
山地 孝祐

新入職員が活躍しています!

4月からたくさんの新人が採用され、各所属で活躍しています。その中から、2名の医療技術部の新人を紹介します。

リハビリテーション療法科 理学療法士 齋藤 和輝（さいとう かずき）

齋藤さんは、北海道出身の22歳。中学校の時、サッカーの部活中にアキレス腱を損傷し、理学療法士と関わった事がこの職業に就いた理由だそうです。中学3年の最後の大きな大会の2~3か月前にケガをしてしまいましたが、リハビリの甲斐あって、大会に出場できたそうです。

現在の仕事の内容は、主に整形外科領域のリハビリを1日に10人程度行っているそうです。職場の雰囲気がとても良く、先輩方は自分の倍以上の患者さんを診ているのに、自分ために時間を割いて、熱心に指導してくれていることに感謝していました。

患者さんから『齋藤さんのおかげで良くなったよ』と声をかけてもらえた時は、とても充実感があり、自然と笑顔が溢れてくるそうです。先輩方に迷惑をかけないように、5年を目途に一人前になれるように頑張りたい、と目標を語ってくれました。



臨床検査科 臨床検査技師 石井 崇元 (いしい たかはる)

石井さんは、愛知県出身の23歳。小学生のころから顕微鏡が大好きで、いつからか、顕微鏡を使って人の役に立てる仕事がしたいと思い、臨床検査技師を目指すようになったそうです。

現在の主な仕事は病理検査で、その他、細菌検査や採血業務等、幅広く活躍しています。病理検査は臨床検査技師の中でも特殊で、『細胞検査士』という資格を取得しないと、細胞の良悪性を判定できないことになっています。その資格を取得するために、日々勉強を頑張っているそうです。当院に就職してから、念願であった顕微鏡を多く使う職場である病理検査室に配属になり、とても充実した毎日だそうです。

将来像を尋ねると、『病理検査にとらわれず、幅広い視野を持って、多くの領域の検査ができる技師を目指したいです』と語ってくれました。

